

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)」 (平成26年度第1回研究会)

日時：平成26年6月7日(土曜日)午後14時より19時

場所：AA 研306室等

趣旨説明：床呂郁哉 (AA 研所員)

報告者：田中雅一 (AA 研共同研究員、京都大学)

概要：当日は第一回目の研究会であるため、まず研究代表者の床呂より「もの研究の展開へ向けて—人間 / 非人間のダイナミクス」と題して本研究課題の趣旨説明が実施された。その内容は以下の通りである。

本研究課題は各地における人間と非人間の「もの」の関係の諸相と、その関係の構築における広義の技術に焦点を当て、新たな視点から人類学的に検討することを主な目的としている。ここで言う「もの」は被造物、人工物だけに留まらず、自然物や人間以外の生物などの非人間の存在者を広く包摂している。

これまで「もの」と人間関係を考察する際には、ともすると近代西欧的な世界観に捉われがちであった。とくにデカルト以降の近代西欧的な認識においては、人間だけが行為の主体性や能動性(エージェンシー)ないし広義の「心」を備えた主体として特権化され、逆に非人間の「もの」は死せる客体としてテクノロジーを通じて一方的に統御される対象であるという理解が通念的には流布している。

これに対して本研究課題では、世界各地における各種の非人間の「もの」との関係の諸相や、人間が「もの」と関わる多様な技術・技芸の具体的な諸相を明らかにすることを通じて、通念的に流布している人間中心主義的な世界観や認識論を超えて、人間と「もの」の関係性を新たな視点から比較検討していくことを目的としている。この目的のため、アジアやアフリカを含む各地で臨地調査を実施している複数の人類学者を中心に学際的な共同研究として実施することを考えている。たとえば本報告では吉田ゆか子によるバリの仮面

に関する民族誌的研究、久保明教によるアイボの民族誌であるとか報告者による真珠貝や舟のエンジンなどに関する事例などを取り上げながら、非人間の「もの」と人間の多様な関係の在り方を指摘し、そこにおいて例えばエージェンシーは人間のみが排他的に占有するものではない可能性などを示唆した。またこうした視点は単に非西欧社会においてだけでなく、欧米を含む現代の科学・技術の領域においても一定程度、有効であることを現代におけるコンピューターと人間の関係などを参照しながら指摘した。

この他、本研究課題における研究遂行上のキーワードの候補としてマテリアリティ、身体と「もの」ないし「もの」の身体化 (embodiment)、「ひと」と「もの」さらに環境 (社会・文化的/生態的) の相互作用、フェティシズム、サイボーグといった論点を提起した。

以上の床呂による趣旨説明と質疑応答に続いて田中雅一 (AA 研共同研究員、京都大学人文科学研究所 ) による「フェティシズムから学ぶモノの世界」と題された研究報告と討議が実施された。その概要は下記の通りである。

フェティシズムから学ぶモノの世界 (要旨)

報告者が『ミクロ人類学の実践』(世界思想社 2009 年)の序章で行った問題提起は、近代を構築する堅固な非対称的な二元論への異議申し立てであった。それらは精神と身体、理性と感情、人とモノ、文化と自然、西洋と非西洋、文明と未開など多岐にわたる。こうした二元論に基づく思考や実践が、西欧の自己像と密接に結びついて非西欧的他者の支配や搾取を正当化し、他方で当の西欧人をも疎外してきたと言えよう。モノについて言えば、それは搾取の対象や支配の道具として位置づけられてきた。こうした非対称的な二元論を克服するには、たんにその関係を逆転したり、こうした二元論が非西欧社会では成立しないといった文化相対主義的な批判を展開したりするだけでは十分とは言えない。以上の問題意識を念頭に、フェティシズムという西欧社会に由来する人とモノとの関係についての概念に注目し、人とモノとの非対称性について考察を試みた。

本発表では、とくに切片淫乱症と訳される性的なフェティシズムを例に、その基本的な性格をまず明らかにした。それは、下着であれ、婦人用自転車のサドルであれ、ハイヒールであれ、モノそのものに対する欲望であって、特定の所有者や女性一般に対する欲望のあり方を意味しない。こうしたモノそのものへのアプローチこそ、われわれはフェティシストから学ぶべきではないのか。それはまた、ポップアートの作品にも通じるモノへの

アプローチである。

野村明宏はウォーホルのマリリン・モンローを例に「絵の向こう側にオリジナルが前提されるのではなく、文字通り「底なし」に、どこまでも表面に留まり続けるイメージの反復と差異化において、像＝媒体そのものをわれわれは経験することになる」（「絵画と肉体」池井望・菊幸一編『「からだ」の社会学』、2008年、149頁）と述べているが、本発表でもフェティシズムの実践を「反復と差異化」とみなす。そして、モノを身につける、モノを集める、モノを通じて人が集うといった活動やそうした一連の活動に注目する研究（考現学、路上観察学会）を論じることの意義を明らかにした。

以上の点を踏まえて、本発表では最後に、モノが何かを表象あるいは象徴する記号として理解する立場を批判し、ここではモノが人や社会にもたらす効果（反復と差異化）に注目するアプローチを提唱した。

以上。